

陸奥國風土記散歩 1

陸奥と渡来系官人

—百濟王敬福・坂上田村麻呂を中心に—

寺岡洋

はじめに

渡来系集団の存在や渡来系文物について、5~6世紀代には、これはそうであろうと言える遺跡（遺構・遺物）は少なからず調査されており、この「散歩」でも播磨・摂津を中心にして紹介しています。

その後、時代が下ると遺跡で追うのは難しくなり文字資料に頼ることが多く、そうすると、どうしても記録が残る律令政府の官人（貴族）の紹介に偏ることになります。今回も渡来系官人ではきわめて高位高官に登った人物を中心にし、奈良～平安時代初頭（8世紀中葉～9世紀初頭）の渡来系官人・氏族と、その関連遺跡を見てみます。

昨年11月、古代山城研究会の例会が盛岡であり、東北（古代の陸奥国）の城柵（じょうさく）官衙遺跡などをいくつか見てまわされた。最北端の城柵である志波城（盛岡市）と胆沢城（岩手県奥州市）は征夷大將軍として有名な坂上田村麻呂が9世紀初に築城したと記録され、陸奥国府・鎮守府である多賀城（宮城県多賀城市）には、8世紀中葉、百濟王敬福（くだらのこにきし・きょうふく）が陸奥守として赴任していた。時代の遡る百濟王敬福から紹介します。

黄金山産金遺跡（宮城県遠田郡涌谷町）

百濟王敬福といえば、なんといっても日本の黄金伝説の始まりとも言える陸奥の地での黄金発見。その採金地が観光地に変身している。

東北新幹線・古川駅で陸羽東線に乗換え、東北本線・小牛田（こごた）駅で石巻線に乗換え、涌谷（わくや）で降りる。東京は快晴だったが、段々と雲行きが怪しくなり、少し雨も降り寒くなつた。田んぼは湿田のように水が残り、天候のせいもあり、風景が寒々と見えてしまつた。国史跡・黄金山（こがねやま）産金遺跡は涌谷駅から約2km強、タクシー一千円くらい。天平ろまん館が傍らに建てられている。



天平ろまん館には砂金に関する展示室もあり、砂金採り体験施設もあった。水が冷たいだろうなと思いながら盆（パン）を持って手を入れると、なんと温かい。教えてもらった即席“椀かけ法”でやってみると、金箔のかけらみたいな砂金がすぐえ、金の比重が砂より重いのがよく分った。

1957年に発掘調査が行なわれており、報告書が復刻されて展示室で販売されていた。関連する論考を集めた「関係資料集」も刊行されており、行き届いている(『天平産金遺跡』、『黄金山産金遺跡』涌谷町)。以下、とくに記さないが引用します。

○ 涌谷の砂金

施設の左手側にきれいに整備された小さい谷が開け、いちばん奥まった場所に式内・黄金山神社が祭られている。この神社周辺が産金遺跡に指定されている。一帯は黄金迫（こがねはざま）といい、谷を流れる小川（黄金沢）では今でも微量の砂金が採れるそうだが、そんなすごい川には見えなかった。

涌谷での採金については、1992年、国立民族学博物館が黄金山神社周辺を含む竈岳（ののだけ）周辺16ヶ所で砂金を採取し、自然科学的分析をしている。「現在、比較的大きな砂金を比較的多く採取できる黄金山神社前を調査してみると、砂金は小川の薄い泥層下部、または側面の赤い礫層に多く存在している。……砂金そのものが堆積した」とあり、最大径のものは22mmだった（重さ不明）。

砂金の特徴として、「銀含有率9.3~12.5%、他の不純物元素である鉄と銅の含有量がいずれも0.1%以下で、世界の砂金と比較しても高純度で、東北地方砂金の特徴を示す」そうだ。

○ 黄金山神社境内の遺跡

神社は山裾と小川に挟まれた狭い場所にあり、社殿の裏手には砂金の採掘跡といわれる窪地が残る。神社の拝殿には現在も1mを越す礎石が見られ、ま

た、神社附近と崖下の小川からは古代の布目瓦（ぬのめがわら）が散らばり、すでに江戸時代から大仏の産金の地ではないかと注目されていた。

建物の軒を飾る軒丸瓦（のきまるかわら）の文様は、重弁（花弁が二重に重なる）の蓮華文（れんげもん）で、花弁が八弁と六弁の2種出土している。前者は陸奥国分寺が創建された時に使われた瓦とまったく同じ文様であり、後者も弁の数が少ないが系統は同じ。軒丸瓦とセットになる軒平瓦（のきひらかわら）も陸奥国分寺のそれと殆ど同意匠であることから、ここに建てられた建物は陸奥国の政策により建てられた建物であることは明らかである。

建物の時期については、丸瓦に「天平……」と籠書きされたものが採取されており、下半が欠けてい るが年号と推定される。天平のつく年号は、天平(729~749)以外に、天平感宝(749)、天平勝 宝(749~757)、天平宝字(757~765)、天平神護(765~767)がある。陸奥国分寺の創 建時期と同じころであれば、天平宝字から天平神護 ころの建物になる。

現在の黃金山神社は江戸時代に再興されたもので、それに神社には瓦は使われない。奈良時代に瓦を葺いた建物は寺院か官衙に限られ、礎石と瓦の存在により仏堂があったと推定されていた。さらに、收拾された「天平……」と箋書きされた瓦製の宝珠破片から、六角円堂とされる。奈良時代の円堂では法隆寺夢殿（八角円堂）がよく知られている。

発掘調査では版築（はんちく）した基壇跡と4ヶ所の根石群が検出され、仏堂の存在が確認された。

百済王敬福と黄金九百両の貢進

『続日本紀』には、天平21年（749）2月、「陸奥国、始めて黄金を貢す、是に於て幣を奉りて畿内七道の諸社に告ぐ」とあり、4月には聖武天皇を始めとする文武百官が東大寺盧舎那仏の前に参集して長文の宣命（せんみょう）を奏している。

宣命には具体的に、陸奥国守従五位上百済王敬福が小田郡から「黄金出でたりと奏して献れり」とある。その時期は、「……衆人は成らじかと疑ひ、朕（われ）は金（くがね）少なけむと念ほし憂ひつつあるに、…」とあるように、塗金のための金の不足が懸念されていた。黄金は盧舍那仏（大仏）の本体が鋳あがつた、まさにその時期に貢進されている。



盧舎那仏は華厳經の教義によるもので、無量の光明をもち万物の創造主としての太陽をかたどる仏として顯現する、といわれるそうだ。

したがって、光り輝く仏身のためどうしても塗金しなければならなかったのであろう。この時、年号も天平勝宝に改元されたのを始め、減税、大赦、叙位など産金を祝して大盤振るまいされている。

むろん、百濟王敬福も渡来系官人としては初めての従三位という高位に叙されている。五位になれば貴族、三位は世に数人もいない特権階級になる。

○ 産金関連者の出自、叙位

産金に関連した人物が百済王敬福を含め7名特記され叙位されているが、渡来系の人物が過半を占めるのが注目される。

国府の官人である大掾（だいじょう）余足人（あぐりたるひと）は、従五位下に。この人は後に、余から百済朝臣に賜姓されている。陸奥介兼鎮守副將軍などを経て最後は従四位下。『新撰姓氏録』では、「百済国都慕王三十世孫惠王より出づ」とある。余という名は百済の王族で、百済王敬福の親類筋かも？

左京の人、朱牟須売（すのむすめ）は无位（むい）から一躍外従五位下と30ランク以上跳ね上がったことからみると、「金を獲たる人」と明記される上総国人、丈部（はせつかべ）大麻呂と同じく、いわゆる後に言う「川師」ではなかつたかと思われる。

『新撰姓氏録』には、栄山忌寸（いみき）の姓を得た唐人朱政がいるが、同族かは不明。

金の冶金をおこなった左京の人、戸淨山（へのじようざん）は大初位上とそこそこに。天平宝字5年（761）、百濟人戸淨道ら4人が松井連に改姓されており、戸淨山も4人のうちに入っていたとみえ、後には松井連淨山と出てくる。内匠介で外從五位下。

百済王敬福を始め、余足人、戸淨山は百済系の人々で、朱牟須売も渡来系であり、採金については百済で蓄積されたノウハウが活用されたであろう。

○ 九百両はなんぼのものか

大々的に祝われた黄金九百両はどれくらいの量目になるのであろうか。涌谷町の資料では金・水銀小1両 \approx 14gと換算して約13kgとする。宮城県の資料では13.5kgでさして差はない（自分のものであれば大差だが）。時価ならば？

ところで、天平宝字元年から3年後の天平勝宝4年（752）、朝貢の形式をとった総勢700余人という桁外れの新羅使節が訪日した（実態は交易であったらしい）。交易は政府が管掌しており、政府に提出された購入リスト（「貢新羅物解（はいしらぎぶつけ）」20数通が正倉院文書に残っている。天平の美女、鳩毛立女屏風の下貼に使われたからである。

輸入品は多種多様だが、黄金が4通見られ高い確率である。内2通には、「伍両」、「十両」と数量が記されている。東野治之氏は、正倉院展図録で、十両を「現在の量目に直して約3.6kgになる」とされ、1両 \approx 360gとなり差が甚だしい。通常、小三両が大一両（約41.9g）になるらしい（「両」『歴史考古学大辞典』吉川弘文館 2007）。

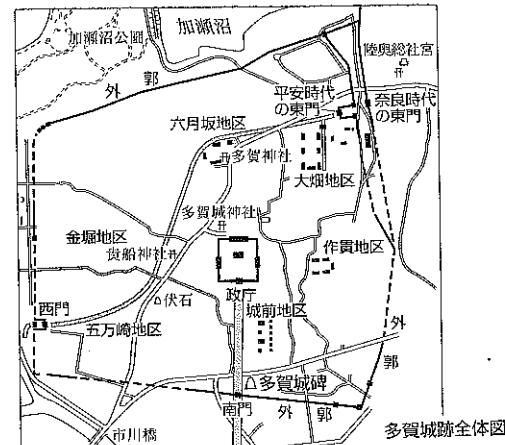
同じ年、政府は「陸奥国の調庸は多賀以北の諸郡には黄金を輸さしむ。その法は正丁四人に一両」と決定し、本格的に金の獲得に乗り出している。この量からみると、やはり1両は14gくらいか。

『東大寺要録』によれば、大仏の鍍金に、1万446両要している。およそ年に900~1000両陸奥の地で採金したことになる。まさに家持が歌ったように金（くがね）花咲く金蔓だった。

【参考文献】東野治之「鳩毛立女屏風下貼文書の研究—貢新羅物解の基礎的考察—」『正倉院文書と木簡の研究』塙書房 1977、同「新羅交易と正倉院宝物」『平成14年 正倉院展図録』奈良国立博物館 2002、皆川完一「貢新羅物解 拾遺」『正倉院文書研究 2』吉川弘文館 1994

大仏造立と渡来系官人

大仏が造られるまでの経緯を追うと奈良時代の渡来系官人・僧・氏族が多く登場し、様々なあり方が見られる。陸奥国とは離れるが百済王敬福と密接に関連するので年表風に簡単に見てみたい。



740（天平12）年 聖武天皇は河内の智識寺の盧舍那仏を拝して感銘し、このような仏を造りたいと思ったことが大仏造立の契機になっている。

この智識寺という寺の名前はふつう見られない名前である。仏への信仰にもとづき、寺や仏像・經典などの財物、労働力などを提供することを知識（智識）というが、そのような知識により造られた寺であったのである。智識寺は柏原市の大平寺廢寺と推定されている（『河内六寺の輝き』柏原市立歴史資料館 2007）。

知識というやり方はもっぱら行基（さょうき）集団が行っていたことで知られており、大野寺の土塔（堺市）や推定山崎院跡（大山崎町）からは知識した人名を刻んだ多くの瓦が出土している。

聖武天皇は盧舍那仏もさることながら、多くの民衆・豪族を巻き込む知識に関心があったようである。天平15年の大仏造営の詔書では、「……國銅を尽して象（かた）を鎔（とか）し、大山を削りて以て堂を構え、……知識となす。……如（も）し更に人の一枝の草、一把の土を持ちて像を助け造らんと情願するあらば、恐（ほしいま）にこれを聽（ゆる）せ……」と述べている。

740年 平城京から恭仁（くに）京に遷都。

741年 行基集団が木津川に泉大橋を架け、泉橋院・泉寺布施屋（ふせや）を建てる。

742年 秦下（はたしもの）嶋麻呂が私財で恭仁宮の「大宮の垣」を築いたことにより、正八位下から從四位下に叙され、太秦公（うづまさのきみ）に賜姓される。秦下の本拠については説が分かれると、攝津国豊島（てしま）郡（淀川北岸）の秦下郷も候補地の一つである。以後、秦氏の族長は太秦公に移る。

743年 大仏造営の詔。紫香楽（しがらき）宮で

作業開始されるが、放棄される。

百済王敬福が陸奥守に。

745年 行基が大僧正に就任。仏教界の最高指導者である。行基は言うまでもないが百済系の僧。

国君麻呂（國中連公麻呂）の初見。外從五位下に昇叙された記事で、紫香楽宮の甲可寺における盧舍那佛建立に関わってのことと推測されている。

平城京に遷都、大仏造立作業再開。

746年 大仏雄型完成か。國中連公麻呂が「造仏長官」と称せられ始める（正倉院文書）。造仏長官というのは大仏造立を目的とした造仏司という官司（官序）のトップで、大仏造営のプロデュサーのような役職らしい。

747～749年 大仏鑄造。8回に分けて鑄造。

749（天平21・天平感宝元・天平勝宝元）年 百済王敬福、黄金九百両の貢進。行基 没。大仏殿の建立へ。大工は猪名部百世（いなべのももよ）。

752（天平勝宝4）年 鎏金開始。大仏開眼。このような式典を職掌とするのは玄蕃頭（げんばのかみ）だそうだが、当日、南中門から諸人を引導して先頭を歩いたのは秦忌寸首麿と伝えられる。

大仏が造られた東大寺の初代別当は良弁（ろうべん）で、この人物の出自は「俗性は百済氏、近江志賀里の人」と伝えられている。滋賀里は大津京が造られたあたりで、志賀漢人（しがのあやひと）の集住地。比叡山延暦寺を開いた最澄も志賀漢人の一派である三津首（みつのおびと）氏である。

754年 鑑真 来朝。

767（神護景雲元）年 國中連公麻呂に從四位下、造寺工猪名部百世に外從五位上を叙位。百世は伊賀の人だが、猪名部氏の本拠は摂津の猪名川（いながわ）流域。新羅系の船匠・大工（建築）。

○ 國中連公麻呂の卒伝（そつでん）

國中連公麻呂は774（宝亀5）年に亡くなっている。『續日本紀』に「卒伝」が記されている。

「散位從四位下 國中連公麻呂卒す。もとは百済國の人なり。その祖父德率（とくそつ） 国骨富（こくこつぶ）は近江朝（663年）……帰化せり。……盧舍那佛を造らしむ。……鎧工敢て手を加ふる者なし。公麻呂、頗る巧思あり。竟に其の功を成す。……宝字二年（758）、大和國葛下郡国中村に居するを以て地に因りて氏を命ず」とある。

公麻呂の祖父と同じく、『播磨國風土記』の編纂者とされる樂浪河内（さざなみのかわち）の父も、66

3年、百済滅亡時に倭国に渡って来た。律令政府の官人を多く輩出した百済系知識人グループである。そのトップに立つのが百済王氏であり、彼らは倭国・日本国での自らの地位の強化のため、知識・技術・技能など様々な分野で密接なネットワークを形成していたと考えられる。

[参考文献] 今井啓一『百済王敬福』総芸舎 1965、大坪秀敏「大仏造営過程における百済系渡来人一百済王氏を中心の一』『国史学研究』15 1989、風馬亞紀子「阿弥陀淨土院機構の再検討』『ヒストリア』207 大阪歴史学会 2007

多賀城跡 多賀城廃寺跡 東北歴史博物館

涌谷の黃金山産金遺跡へ出かけた日は仙台に泊まり、牛タンも話の種に食べる。翌朝、快晴。仙台市立博物館が開館するまで裏山の青葉城へ。仙台では新羅人が関わったとされる与兵衛沼（よひいぬま）窯跡が注目される。慶州雁鴨池で出土している棟平瓦と近似するといわれる遺物は、12月からの特別展で展示予定で見れず。

多賀城創建前の陸奥国府とされる郡山遺跡は、現地に行けば展示室があるが行けなかった。

東北本線・国府多賀城駅で降り、駅前の館前（たてまえ）遺跡へ。国司クラスの規模の大きい邸宅跡。多賀城の前面（南側）は史跡整備中のようである。

多賀城の外郭は略四角形で、その南東の隅から築地跡に沿って西に歩き、南門跡から南北大路跡を北上した。南門すぐに芭蕉も見た多賀城碑がある。碑は762（天平宝字6）年、多賀城修築の記念碑。碑文によると、多賀城の創建は724（神亀元）年である。「多賀城 京を去ること一千五百里……鞍鞆國の界を去ること三千里」と氣宇壮大。

政府と外郭南門間の道路、鴻ノ池・城前地区は発掘調査され埋め戻されていたが、どのあたりなのは見当ついた（「多賀城跡79次」2007.1.10）。

あと、発掘調査が進んでいる六月坂地区、東門跡、大畠地区、作貫地区と多賀城跡東半分を歩いた。

東北歴史博物館の前を通り多賀城廃寺へ。史跡公園に整備されている。大宰府の觀音寺と伽藍配置が近似しており、「觀音寺」という墨書き土器も周辺地区で出土している。

昼飯を食べるとこがなく、腹をすかせて東北歴史博物館の食堂へ。晩は盛岡の地酒バーで乾杯。